

# 静脩

1999年3月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 35, No. 4

## 総合研究からみた集中方式的図書館機能充実への願い

大学院人間・環境学研究科教授 北 島 能 房

平成四年四月、旧教養部法政教室に赴任して以来、今年で早くも八回目の桜の季節を迎えています。その年の十月には、総合人間学部と共に設置された人間・環境学研究科第二専攻に転属したわけですが、最初の一年間は旧教養部において「政治学」関連の授業を担当しました。環境経済学が専門であった私がするわけですから、「この授業ははたして政治学の授業か？」という学生諸氏の当然の疑問を冷や汗もので受け止めた日々が、今となってはなつかしく思い出されます。

昨年度、私どもの研究科は5人の委員による外部評価を実施しました。「自然、人間、文化の共生と科学・技術の新たなパラダイム発見」をめざして総合的な教育・研究を行うという設置理念からみでの現状評価をお願いしたわけです。研究科の準備委員の一人としてお手伝いさせて頂いた感想では、理念達成にむけて努力しているとの評価を頂けた反面、特に、「総合的な教育・研究」の面で厳しい指摘を頂いたように思います。

総合研究を成功させる要件については、人文科学研究所において幾多の総合研究プロジェクトを手がけられた桑原武夫名誉教授のご意見（『桑原武夫—その文学と未来構想』に所収）や、初代の総合人間学部長を勤められた木下富雄名誉教授のご意見（広島大学総合科学部創立二十

周年シンポジウム、『二十一世紀へのパラダイムシフト』に所収）があります。お二人とも「個別学問分野の力量を前提として、他の領域の仕事がわかり、少なくとも



もわかれようとする熱意をもつ専門家の集まりが必要」ということをいわれています。これを学部教育と大学院教育との関係にあてはめてみますと、学部教育においては個別学問分野の力量をつけ、大学院において総合教育・研究を行うというのが筋道になります。

他方、実業界から参加された委員の方は、「基礎学力とともに創造力や思考力を鍛える訓練をしてほしい。また、学問の面白さを学生に教えることに努力してほしい。学問の面白さの発見は会社に入ってから仕事の面白さの発見に通じるから」との意見を述べられています。

基礎学力については、各学部が専門基礎科目の分担を通じて充実をはかるにしても、人間・環境問題に対する総合的・学際的な研究・教育の成果を、一般教養科目に反映させていくことは研

究科にとっての今後の大きな使命でなかろうか、というご意見が多かったように思います。

これらのご意見を聞きながら、私は三十年程前の米国での留學生活を思い出していました。地域科学の授業において、その分野の第一人者の方の授業を受けていた時のことです。標準的な講義内容もほぼ終わりにかかったころ、「これから相対性理論の講義を行う」といわれたのです。当然ながら、学生は何でそんな内容を勉強せねばならないのかと思い、質問したものです。その時の答はだいたい次のようなものだったように思います。「君達、ニューヨークにいる人々が感じる一秒の時間と、インドのニューデリーにいる人々が感じる一秒の時間は同じと思うか？もしも異なっているなら、この違いを考慮した形の地域開発評価を行わねばならない。要は、時間軸は縮むんだよ」。

相対性理論の方は正直いって、現在でもどのように地域開発評価に適用しうるのはわかりません。ただ、その方の授業で面白いと感じたことがあります。その一つは「積分路に独立」という概念を知ったことです。わが国の昭和三十年代のように、所得水準も低く、環境保全水準も低い状態を考えてみます。所得水準も環境保全水準も倍にする経済計画が樹立されたとしてみましょう。現在の水準から目的水準に移行させるには、いくつもの経路があります。まず、所得を倍にしてから環境改善をはかる経路や、所得と環境改善とを同時に実施していく経路などです。積分路に独立とは、経路ごとに評価関数の変化分を積分していけば、総変化分は初期水準と目的水準にのみ依存して経路には依存しないというものです。

積分路に独立なベクトル場は保存ベクトル場と呼ばれ、複素空間に拡張して使用される留数の理論などが物理現象の解析に広く使用されていますが、経済評価の分野で留数の理論が使用されたことは聞いたことがありません。何故なら、積分路に独立の仮定を経済学的に解釈すれば、合理的な経済人(これにも定義がありますが)を仮定することになり、虚数部が関係しうるとは考えられないからです。だいたい、ここまでが個別科学の分野の話です。

積分路に独立の仮定に基礎をおく環境の価値の計量化手法を、具体的な事例、例えば、世界遺産に指定されている屋久島の環境を保全することの経済価値計測に応用することを考えるなら、もはや個別科学をはなれて総合研究の領域に入ります。森林環境特性だけでなく国有林経営のことなど、多くの個別的知見の抽象的概括が必要になります。現実には、異なる分野の専門家からなるチームでこの種の総合研究を行うわけですが、こうした総合研究をにないうの人材育成の観点から重要なことは、学生諸氏が多くの分野の文献・資料を一所で探索しうることの出来る図書館機能の充実です。環境問題においては、森林は森林だけで存在するのではなく下流の河川や海洋と人間界とが連関しあっていることを思えば、知的好奇心の広がりに対応しうる形で文献・資料が収書されていてほしいものです。

また、地球規模での環境問題の重要性の高まりとともに、各国における環境と経済社会の関わり方の比較制度分析が大事になりつつあります。地球規模での新しい制度設計を試みていくためにも、わが国を含めて各国の既存の制度の仕組みと論理を理解していかなければならないとの視点からです。この種の総合研究を行っていくためには、国内外の法典・判例集や国会の議事録や企業等の財務諸表などに容易にアクセスしうる体制づくりが必須になります。このためには、学内外の図書館の相互協力はもとより、電子図書館での有料を含めてのオンライン・サービスを利用者にとってより利用しやすいものにしていく必要があります。

本学の図書館システムは、六十あまりの部局図書室と附属図書館が「調整された分散方式」のもとに連携しあうものです。固有の歴史をもって整合的な形で継承されてきた仕組みでありませんが、総合的・学際的な研究・教育を盛んにしていくためには、出来ることから集中方式的図書館機能を充実させて頂きたいとの一社会科学系教員の考えの一端を述べさせて頂いた次第です。

(きたばたけ よしふさ)

# 中国古代における書物の編纂

人文科学研究所助教授 富谷 至

読書・勉学に熱心であることをいう「韋編三絶」という成句は、孔子が『易経』を繰り返し読んだため、書物の綴じ紐が三度も切れてしまったといった故事を典故としていることはよく知られている。「韋編」とは、竹簡をなめし皮で綴じたもの、少なくとも『広辞苑』などの一般的辞書にはそう解説されている。

私がいつどこでこの成語を習ったのか、もはや定かでないが、最近に至るまで、私も辞書の解説通りに信じてきた。ただ、疑念というほどの大層なものではないにしろ、なんとなく腑に落ちないところがあった。何故、なめし皮なのだろうか？ 竹簡を綴じる場合には当時はなめし皮が使われていたのだろうか？ 孔子が持っていた上等の本（もちろん簡牘の冊書）は、なめし皮で特に綴じていたのだろうか？ それとも、丈夫な皮製の紐が三度も切れるほどよく使ったという、これは比喩なのか？

木簡・竹簡を専門にやりだして、疑問が少し膨らんできた。出土の簡牘のなかには、綴じ紐がそのまま残っている冊書があるが、なめし皮のものではなく、そもそも、綴じ紐は、「繩」と当時は呼んでいたらしい。

両行百札二百繩十枚  
建昭二年二月癸酉尉史□付第廿五燧  
(EPT 59 .154A)

これは、近年内モンゴルエチナ川流域の漢代烽燧遺址から出土した木簡で、その内容は、書写材料の受領記録、「両行」とは二行書きの、「札」とは一行がきの簡牘、それを編綴するものが「繩」である。繩である以上、それは植物繊維を搓ったもので、少なくとも皮ではなからう。

あるとき、学術雑誌に掲載されていた中国の研究者の短文に接し、目から鱗が落ちるがごとくに疑問が氷解したのである。その説は、「韋」と

は、緯度の「緯」に通じ、つまりヨコ糸のことだというのだ。となれば、なめし皮とは何の関係もなく、「韋編」とはヨコに紐をかけて編綴すること、もしくは編綴した冊書に他ならない。孔子が読んでいた『易経』も、普通一般の「繩」で綴じたものに過ぎない。

ところで、孔子は冊書となっていた『易経』をどういう風にして読んでいたのだろうか。恐らくは巻物の形をしていたであろう竹簡のそれぞれを韋編はどのように綴じられ、収巻されていたのだろうか。

ここに、それを語る格好の出土簡牘が存在する。

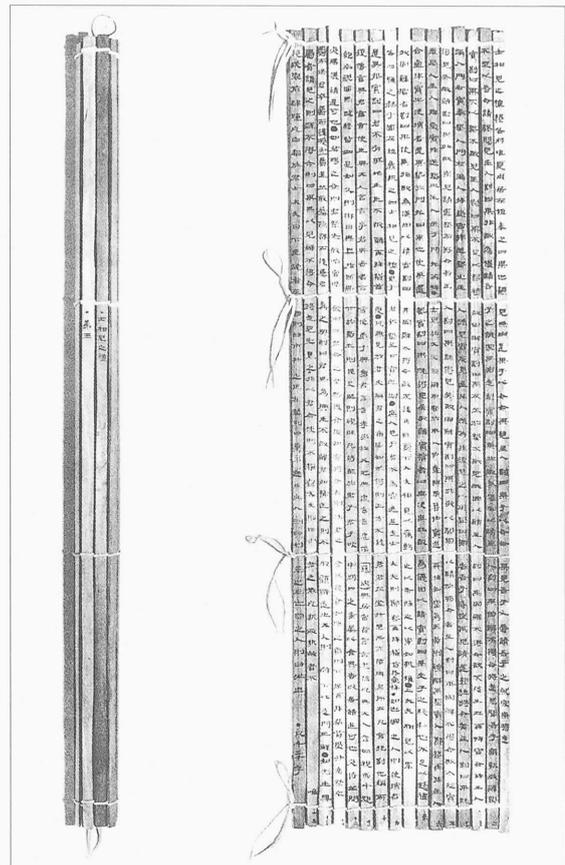


図1

図1は、武威県の漢代墓の中から発見された『儀禮』という『易経』とおなじ経書である。長さは約55センチ、当時、経書は2尺4寸(55.92センチ)の札に書きまわりであったので、出土の簡は規格に合ったものといってよい。武威出土の『儀禮』簡は総数500枚ほどであり、ここにあげたのは「士相見之禮」と呼ばれる編であり、合計16枚の簡、1020字が書かれており、それで一卷全部である。

現行本の『儀禮』との対比など興味あるこれは出土文字資料だが、いま注目したいのは、「士相見之禮」なる編名が書かれている簡とその位置である。すなわち、先頭の第一簡と第二簡の背面にそれは記入されており、このことは最後の簡から文字の記入した面を内側にして先頭の簡に向かって巻きこんでいくことを意味している。巻き終わった段階では、編名と編次が表側に位置し、広げて読むにあたり、順次先頭の簡から開いていけばよく、書物の形式、収巻の方法として理にかなっているといえよう。

最後の簡から巻きこんでいくのであれば、綴

じ縄も最後の簡からかけていくはずで、綴じ紐の余りは、先頭の簡にきて、収巻した場合の余り紐が処理しやすい。すなわち、図1の復元の仕方は、紐のかけ方において、誤っているといわねばならない。

書物簡は以上のような体裁をもっていた。しかしながら、すべての冊書がかかる収巻の方法をとっていたのかといえば、そうではない。

図2は、敦煌近辺の懸泉置遺址で出土した冊書である。前漢陽朔二年(23BC)の紀年をもち、綴じ糸がそのまま残っていた編綴木簡であるが、その綴じかたは先に述べた方法とは異なり、紐の余りが最後の簡にきており、先頭簡から紐がかけられてきたことを示している。

この冊書は、車輪の破損状況を記したリスト(帳簿)と、それを上級官庁に送る送り状がついた簡牘であるが、こういった帳簿の類は、おそらくは先頭簡から巻きこんでいったに違いない。帳簿は、順次追加されていくもの、いわばカードの集積でもある。今日我々の状況もそうであるが、追加もしくは入れ替えという点では、最初か

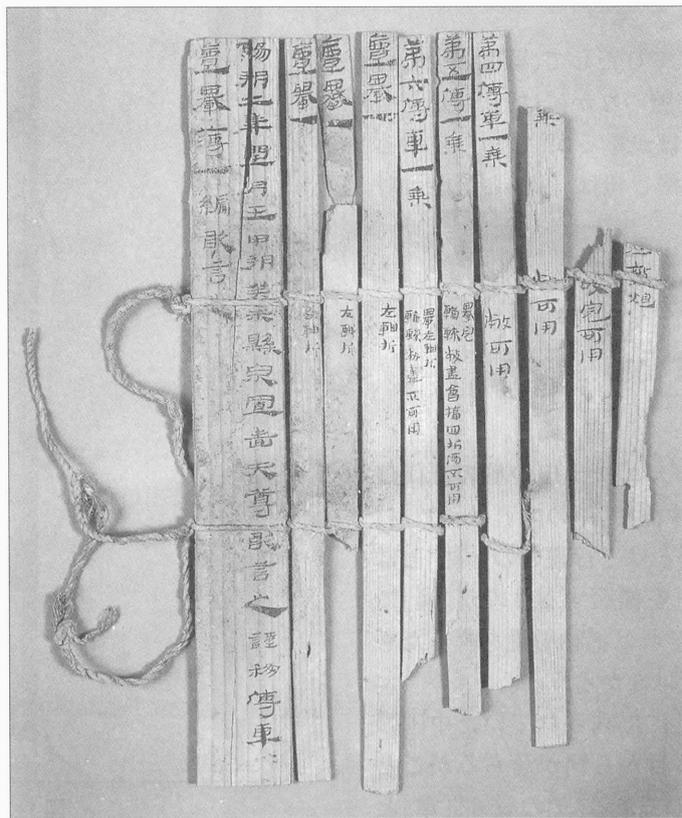


図2

ら巻きこんでいき、また先頭簡から紐をかけていくほうが機能的だといえよう。事実、ここにあげた例だけでなく、いくつかの帳簿簡は最終簡の背面に署名、点検の注記をもつものもあり、収巻は第一番目の簡から、巻き込んでいったことをはっきりと物語っている。

読むための書物簡と、整理のためのファイル簡とでは、同じ冊書の形態をとってはいるが、編綴、収巻に違いがあったのである。

このことを踏まえて、私はさらに次のような仮説が導き出せるのではないかと考えている。

書物には、完成品となる前段階、言い換えれば編纂の過程があった。それは追加・挿入・組替えの作業に他ならないが、簡牘といった書写材料

は、それが一種のカードともいえる特徴を有していたがため、編纂は容易であった。とともに、追加・挿入を前提としたファイル簡の期間を経た後に書物簡として完成を見た。

中国戦国時代、紙が未だ発見されてはいない諸子百家の書物には、同じ内容をもった編が存在し、また明らかに他の思想家の書、その一部が混入した形跡が認められる。そういった現象は、当時の簡牘といった書写材料、その編綴の有りが与って力あり、また書物はかかる編纂の過程を経てきたことを如実に物語っていると思えるのである。

(とみや いたる)

## 新入生

### オリエンテーションのご案内

新年度のスタートをきる4月、キャンパスに咲く桜と新入生の姿が本格的な春の到来を感じさせてくれます。新入生の皆さんに図書館の利用方法をお知らせして、大いに利用していただこうと、右記の日程でオリエンテーションを開催いたします。図書館の建物内の設備やいろいろなサービスを知っていただき、キャンパス・ライフに役立てていただきたいと思います。同じ内容で、5回開催しますので、都合のよい日にご参加ください。

日時：4月19日（月）～23日（金）

時間：12：10～12：45

場所：附属図書館3階AVホール

内容：1. 附属図書館の設備の案内  
2. 各種サービスの内容説明  
3. カード目録とOPAC\*について

オプション

希望される方に、終了後約15分ほど1階OPAC端末で実習を行います。

\*OPAC：学内所蔵の図書や雑誌を検索するシステム

## 沿革史編纂から大学アーカイヴズへ

大学院文学研究科助手・百年史編集史料室員 西山 伸

1990（平成2）年に開始された『京都大学百年史』の編纂事業も、まもなく10年を迎えることになる。すでに部局史編（3巻）、総説編、それに『京都大学百年史 写真集』および小冊子『京大百年』を刊行し、残すは資料編（3巻）となった。6年間この仕事に携わってきた筆者の実感としては、マラソンに例えればようやく折り返し点を過ぎ、はるかかなたにゴールとなる競技場が見えてきた、といったところであろうか。もちろん、資料編の編集には独自の大変さがあり、まだまだ心臓破りの丘が残っていることはよく承知しているが。

最近よくひとから「編纂が終わったら、百年史編集史料室はどうなるの」と聞かれることがある。百年史を編纂するにあたっては、数えきれない点数の京都大学に関する史料を利用してきた。いちばんの根幹となった大学内の行政史料をはじめ、『学報』『広報』などの大学の刊行物、書翰・日記等大学関係者の個人史料、新聞、雑誌、伝記、回想録、写真、ピラ等々、今回の史料収集によって新たに発見された史料も多い。確かに、これらの貴重な資料を散逸させずにおくことが焦眉の課題となっていることは事実である。

さて、近年国立大学でも自らの大学に関する史料を収集、整理、保存し、利用に供する機関が作られるようになってきた。東京大学史料室（1987年設置）、九州大学大学史料室（1992年設置）、名古屋大学史料室（1996年設置）などがそれである。これらの機関は、いずれも沿革史編纂を直接の契機として作られたものだが、では単に収集した資料の散逸を防ぐためのみに存在しているかという点を決してそうではない。それぞれ研究紀要、ニュース、史料集といった成果を定期的に発行しているのはもちろん、東京大学史料室では昨年『東京大学の学徒動員学徒出陣』という600頁に及ぶ詳細な調

査研究書を刊行したし、九州大学大学史料室では1997年度より全学共通教育科目「九州大学の歴史」を開講し、同時にそのためのカリキュラムの開発研究も開始している。



また、私立大学中心の組織であるが、全国大学史資料協議会が1996年に発足（その前身の組織は1988年発足）し、63大学、24個人会員の参加を数え（1998年1月現在）、沿革史の編纂のみならず大学史史料の収集、保存、利用などについての情報交換、研究交流などを盛んに行っている。

このような動向の背景としてとりあえず次の二点が考えられる。第一は、史料保存に関する認識の深化である。すでに1971年には国立公文書館が設置されていたが、1987年には「公文書等を歴史資料として保存し、利用に供する」ことを目的として公文書館法が制定され、地方自治体でも文書館を設置するところが次第に増えてきた。学問分野としても、「記録史料学」が提唱され、史料の保存、利用に関する知識と技術の体系化が図られるようになってきている（安藤正人・青山英幸編著『記録史料の管理と文書館』北海道大学図書刊行会、1996年、安藤正人『記録史料学と現代アーカイヴズの科学をめざして』吉川弘文館、1998年）。第二は、公の機関に対する社会の要請の変化である。「情報公開」「説明責任」といった言葉に表れているように、公の機関は自らのもつ情報を開示し、存在理由の説明を求められるようになってきた（新聞によると、情報公開法もようやく今

年3月には成立するという)。とりわけ大学には「説明責任」を求める声が強く、多数の自己点検・評価報告書が作成されていることは周知のとおりである。

しかし、京都大学を含めた従来の大学が、史料にもとづき、自らの存在理由についてどれだけ考えてきたかとなると、実は甚だ心もとないのではなからうか。大学組織の巨大化、学問分野の細分化によって、大学のあり方を歴史的、総合的に考える場が存在していないのではないかという疑問が生じるのである。このような場として不可欠なのが大学アーカイヴズ（大学史料館あるいは大学文書館）といわれる機関であろう。前述の東京大学、九州大学、名古屋大学や各私立大学の機関も基本的にはこの大学アーカイヴズを目指しているといってよい。大学アーカイヴズとは、非現用となった学内行政史料をはじめ自らの大学に関する学内外の史料を継続的に収集、管理し、大学および大学史に関する調査研究を行うとともにその史料を利用に供する機関であるといえるが、もう一步踏み込んでその機能を説明すると次のようになる。一般的に文書館には「文書記録の行政的経営的価値にもとづく行政経営サービス機能」と「文書記録の歴史的文化的価値にもとづく学術文化機能」とがあるといわれる（高橋実『文書館運動の周辺』岩田書院、1996年）が、具体的に大学にあてはめて考えると、事務サイドとしては文書の集中的管理による事務の効率化が図られ、なおかつ種々の将来計画策定のための基礎資料として利用でき、一方教員サイドからすれば、自らの大学の歴史や大学のあり方についての教育・研究のセンターとして学内外に研究業績その他様々なメッセージを発信することが期待できる。先に紹介した東京大学や九州大学の業績は、正に大学アーカイヴズでなければできないものだといえよう。

このような機能を果たすことによって、大学アーカイヴズは、継続的、恒常的な自己点検の場となることができ、さらにいえば、構成員にとって自らの大学のアイデンティティを確かなものとする場となるはずである。もちろん、大学のアイデンティティといっても、いたずらな

愛校心などではない。それぞれの大学が、学術研究機関としての批判的な視点は持ちつつ、自らの存在理由を明らかにすることが今ほど求められている時はないと思うのである。そう考えると、大学アーカイヴズは、ある意味では大学の中核機関の役割の一端を担うことになるのであろう。

京都大学にアーカイヴズを設置するために今後解決しなければならない課題は多い。ごく簡単にあげてみても、第一に、学内行政史料をスムーズに移管するため、大学アーカイヴズを公文書管理の流れの中に位置づけなければならないこと、第二に、既存の組織との関係を考えなければならないこと一類似の組織として図書館、総合博物館があるが、扱う対象物や果たすべき機能からすると、筆者としては三者それぞれ別個に存在するべきと考える一、第三に、専門的人材を継続的に確保できるかということ、第四に、必要なスペースを確保できるかということ、等々である。このように課題は多いが、それらを解決するだけの価値は十二分にあると思う。京都大学が京都大学として存在し続けるためにも大学アーカイヴズは必要不可欠な機関ではないかと強調して筆を擱くことにする。

（本稿を執筆するにあたっては、注記の各著作に加え、九州大学大学史料室における議論を参考にさせていただいた。記して感謝の意を表したい。）

（にしやま しん）

## 薬学部図書室紹介

### —シリーズ「京都大学図書室巡り」—

薬学部は、1960（昭和35）年4月前身の医学部薬学科から京都大学第9番目の学部として独立しました。1997（平成10）年4月からは大学院薬学研究科・薬学部として活動しています。ですから、本来は大学院薬学研究科・薬学部図書室としないといけないのですが、ここでは以下簡単に薬学部図書室と呼ぶことにします。

薬学部図書室は、閲覧席が30席あまりのこじんまりした図書室です。薬学部建物の東の端、薬学部記念館の一階が図書室になっています。室内は開架式の書架と閲覧席、事務室部分になっています。事務室部分は一面がカウンターになっていますが、基本的に開放されており、利用スペースと事務スペースが仕切られた構造にはなっていません。

学内の利用者は入館・閲覧に対して特に手続きの必要はありません。開架書架部分は利用者に自由に見て貰っています。1980年以前の雑誌は地下書庫に別置していますので、それらをご利用の時は職員に声をかけてください。一日の来館者数は通常日だと200人前後です。最近では、閲覧席が満席になることも結構あります。文献複写の依頼を受け付けていますので、校費で複写される場合は文献複写依頼書を持参してください。私費のばあいは現金でお支払いください。学部外の人で貸し出しを希望される方は、お手数ですが相互利用書をご持参ください。

学外からの文献複写依頼はかなりたくさんあります。最近では学術情報センターのILL (Inter Library Loan) システムを利用して、コンピュータネットワークで依頼するのが主流です。ち

なみに、薬学部図書室が平成9年度にILLシステムで受け付けた件数は3,262件です。年間の開館日はだいたい245日前後ですから、一日に13件ちょっとになります。現金での複写依頼も受け付けていますので、システム以外にも郵送、FAX、来館等で依頼があります。

図書室職員は四名です。ベテラン、中堅と若手の組み合わせで構成されており、職員の能力・意欲は京都大学図書館・室の中でも有数であるとは思っているのですが、残念なことにそうやって誉めてくれる人はいません。

蔵書構成は自然科学系の図書室であるため、洋雑誌が中心になっています。コレクションとしては本草関係の国書・漢籍が約440点あります。このなかの「本朝食鑑」はNHK教育テレビ「うまいもの名鑑」の「すぐき」を紹介する番組でも使われました。また、化学をやられる人は誰でもご存知のケミカル・アブストラクトを冊子体で1997年までそろえています。1998年から冊子体は附属図書館に設置し、CD-ROM版を農学部、工学部、理学部と共に、全学で利用できるようネットワーク提供しています。この他にも薬学部には色々な資料があります。

自然科学系のばあい、図書館にこなくても必要な資料が入手できるように徐々になりつつありますが、薬学部図書室はまだまだ現役です。ぜひ、一度利用してみてください。そして、分からないことがあれば職員に声をかけてください。

(前薬学部図書掛長 渡邊 誠)

# 平成10年度全国共同利用図書資料（大型コレクション）

## 「18世紀フランス建築・都市資料」の購入について

平成10年度全国共同利用図書資料（大型コレクション）として、「18世紀フランス建築・都市資料」が購入されました。このコレクションは16世紀から18世紀にわたるフランスの教会、王宮、城館などの建造物、都市街路、広場、名所、景観等に関する資料です。これらの資料は、都市図や木版画をはじめ、多数の地図、景観画を含み建築史・技術史のみならずフランス近世歴史学、都市史、文化史、地誌研究上必須の貴重な第一次資料で構成されています。また、本コレクションの図版の精密さが研究的価値として特筆されます。

さらに、これらのコレクションが新たに附属図書館蔵書に加わることによって、1991年に京都大学附属図書館に収蔵された『パリ市歴史・地誌関係資料コレクション』を補完して、広く当時の社会文化一般にわたる近世西欧の研究に資する重要な基礎資料となります。本学及び全国の建築史・技術史のみならず近世歴史学分野の研究者にとって学術・研究上の利便は高まり、当該分野だけでなく関連分野の研究も飛躍的発展が見込まれます。

附属図書館ではこれらのコレクションを電子的に加工し、ネットワーク上で広く情報提供することを計画しており、新たな展開が期待されます。

# 平成10年度全国共同利用図書資料（大型コレクション）

## 「18世紀フランス建築・都市資料」リスト

### 1. ブロンデル：フランス建築（初版）全4冊

Blondel, J. F. : Architecture Française, ou Recueil des Plans, Élévations, coupes et Profils des Eglises, Maisons Royales, Palais, Hôtels & Edifices les plus considérables de Paris, ainsi que des Châteaux & Maisons de plaisance situés aux environs de cette Ville, ou en d'autres endroits de la France, bâtis par les plus célèbres Architectes, & mesurés exactement sur les lieux. Avec la description de ces Edifices, & Dissertations utiles & intéressants sur chaque espèce de Batiment. Enrichi de 498 planches en taille-douce. Paris, Jombert, 1752-1756. 4 vols.

### 2. クーザン：遠近画法（初版）

Cousin, J. : Livre de Perspective de Jehan Cousin Senonois, Maistre Paictre à Paris. 58 figures géométriques dans le texte, don't 16 à pleine page et 5 repliees. Édition originale. Paris, Jehan le Royer, 1560.

### 3. ピトルー：パリ市庁舎建築計画ならびに橋梁建設の技術（初版）

Pitrou, R. : Recueil de Differents Projets d'Architecture de Charpente et Autres Concernant la Contruction des Ponts. Avec 35 planches á double page. Paris, chez la Veive de l'Auteur, 1756.

4. クアドリ：ヴェネツィアのサンマルコ広場

Quadri, A. : *La Pizza di San Marco in Venezia considerata come monumento d'art e di storia.* Engraved and hand-coloured half title & 16 engraved hand-coloured plates, a few heightened in gilt. Venezia, Tipografia di Commercio, 1831.

5. スミートン：エディストン灯台再建に関する報告書（第2版）

Smeaton, J. : *A Narrative of the Building and a Description of the Construction of the Edystone Lighthouse with Stone; to which is subjoined, An Appendix, giving some account of the lighthouse on the Spurn Point, built upon a sand. With 23 full-page plates.* 2nd edition. London, Printed by T. Davison, for Longman, Hurst, Rees, Orme, and Brown, 1813.

6. ティエリー編：図版集（エトワール凱旋門）

Thierry, J. D. : *Arc de Triomphe de l'Étoile.* Publié avec l'approbation et sous les auspices de Mr. Ministre des Travaux Publics. Avec 26 planches h.-t. Paris, Typographie de Firmin Didot, 1845.

7. ボーリユー：17世紀フランス東北部主要都市地図集成（全10巻合本3冊）

Beaulieu, S. de P. de : *Plan et Cartes des Ville d'Artois.* Titre gravé par N. Cochin. 6 f. de texte, 42 planches (sur 43). (Paris, c.1668). *Les Plans et Profils ... du Comté de Flandre.* Titre et frontis. gravés par Romeyn de Hooghe, 9 f. de texte, 81 planches (sur 85). Paris, par le Chevalier de Beaulieu, (1667). *Les Plans et Profils... du Comté d' Alost ou Flandre Imperial.* Titre et 2 f. de texte, 11 planches. Paris, par le Sr. de Beaulieu, (c.1667). *Les Plans et profils ... du Duché de Brabant.* Titre gravé par R. de Hooghe, 1 f. de texte, 8 planches. Paris, par le Sr. de Beaulieu, (c.1667). *Les Plans et Profils ... du Duché de Gueldre.*

Titre gravé par R. de Hooghe, 1 planche. Paris, par le Chevalier de Beaulieu (c.1668). *Les Plans et Profils ... du Duché de Cambrai.* Titre gravé par R. de Hooghe, 1 f. de texte, 6 planches. (Paris, c.1668). *Les Plans et Profils ... du Comté de Haynaut.* Titre gravé par R. de Hooghe, 2 f. de texte, 33 planches (sur 37). Paris, par le Chevalier de Beaulieu, (c.1668). *Les Plans et Profils ... du Comté de Namur.* Titre gravé par R. de Hooghe, 1 f. de texte, 10 planches (sur 15). (Paris, c.1667). *Les Plans et Profils ... du Duché de Limbourg.* Titre gravé par R. de Hooghe. 3 planches. (Paris, c.1667). *Les Plans et Profils... du Duché de Luxembourg.* Titre grave par R. de Hooghe, 3 f. texte, 15 planches. (Paris, c.1667). 10 parties en 3 vols.

8. 建築家ガスパール・アンドレ作品集（テキスト及び図版共全14分冊）

André, G. : *L'OEuvre de Gaspard André.* Introduction par Edouard Aynard. Avec un port-front, 87 planches en 8 livraisons et nombreuses illus. dans le texte. Lyon, Storck, 1898. 14 livraisons en une chemise

9. プフノール：ドルルムによる（アネーの館）—その歴史的研究—

Pfnor, R. : *Monographie du Château d'Anet Construit par Phillibert de l'Orme en MDXLVIII.* Dessinée, gravée et accompagnée d'un texte historique et descriptif. 56 planches, don't 2 en coul. et 1 à double page. Paris, Chez l'Auteur, 1867.

10. 新パリ市庁 —1872~1900年—  
Vachon, M. : Le Nouvel Hôtel de Ville de Paris, 1872~1900. Avec nombr. planches h.-t, et illus. Paris, Édition du Conseil Municipal, 1900.
11. デエール：図版集《大トリアノン宮》と《小トリアノン宮》（全2冊）  
Versailles. Deshairs, L. : Le Grand Trianon. Architecture, Décoration, Ameublement. 62 planches. (Pl. no 1-60 en 62 pls.) / Le Petit Trianon. Architecture, Décoration, Ameublement. 98 planches. (Planches 15, 18, 73, 78 manquent.). Introduction par Léon Deshairs. Paris, Librairie des Arts Décoratifs, s. d. 2vols.
12. デジャルダン：小トリアノン宮  
Versailles. Desjardins, G. : Le Petit-Trianon. Histoire et Description. Avec 21 planches h.-t, et nombr. illus. dans le texte. Versailles, Bernard, 1885.
13. ジル文／ランベール画：ヴェルサイユと二つのトリアノン宮（全2冊）  
Versailles. Gille, Ph.(texte) / Lambert, M.(illus.) : Versailles et les Deux Trianons. Texte par Philippe Gille. Dessins et Relevés par Marcel Lambert. Illustré de 2 portraits en frontispices, de 53 planches h.-t. don't 19 en couleurs et de 19 à double page don't 2 en couleurs. Tours, Maison Alfred Mame et Fils, 1889-1900.
14. 図版集（トリアノン宮）  
Versaille. Les Trianons. (Le Grands Palais de France). Introduction et Notices par Pierre de Nolhac. 110 planche. Avec notice et plans. Paris, Librairie Centrale d'Art & d'Architecture, s.d.
15. 「海軍省」の外部及び内部装飾図録集  
Les Vieux Hôtels de Paris. Le Ministère de la Marine. Ancien grand-meuble de la couronne. Construit par Gabriel de 1762 à 1772. Decorations extérieures et intérieures Notice historique et descriptive par J. Vacquier. Paris, Chez F. Contet, 1922.

## 教官寄贈図書一覧(平成10年9月~12月)

| 身分    | 寄贈者氏名 | 寄贈図書名               | 出版社         | 出版年  |
|-------|-------|---------------------|-------------|------|
| 教授    | 木村 逸郎 | 原子力がひらく世紀           | (社) 日本原子力学会 | 1998 |
| 助教授   | 宇任 宏幸 | 構造変化と資本蓄積           | 有斐閣         | 1998 |
| 教授    | 石田 亨  | Community Computing | WILEY       | 1998 |
| 教授    | 渡辺 弘之 | アジア動物誌              | めこん         | 1998 |
| 教授    | 礪波 護  | 唐の行政機構と官僚           | 中央公論社       | 1998 |
| 教授    | 新宮 秀夫 | 幸福ということ             | 日本放送出版協会    | 1998 |
| 教授    | 富岡 清  | 逆合成のノウハウ 有機合成の戦略    | 化学同人        | 1998 |
| 非常勤講師 | 柳田 征司 | 室町時代語資料としての抄物の研究    | 武蔵野書院       | 1998 |
| 教授    | 松田 清  | 洋学の書誌的研究            | 臨川書店        | 1998 |
| 教授    | 川上 貢  | 日本建築史論考             | 中央公論美術出版    | 1998 |
| 教授    | 西井 正弘 | 図説国際法               | 有斐閣ブックス     | 1998 |

|      |       |   |   |      |
|------|-------|---|---|------|
| 教授   | 石黒 武彦 | Organic Super-conductors  | Springer-Verlag                                     | 1998 |
| 名誉教授 | 清水 茂  | 完訳水滸伝 1, 2  | 岩波文庫  | 1998 |
| 教授   | 林 力丸  | 高圧バイオテクノロジー   | さいえい出版  | 1998 |
| 教授   | 林 力丸  | High Pressure Food Science, Bioscience and Chemistry                                | The Royal Society of Chemistry Information Services | 1998 |
| 教授   | 村嶋 由直 | 中国の林業発展と市場経済  | 日本林業調査会   | 1998 |
| 教授   | 村嶋 由直 | アメリカ林業と環境問題   | 日本経済評論社   | 1998 |
| 助手   | 太田伊久雄 | アメリカ林業と環境問題   | 日本経済評論社   | 1998 |
| 助教授  | 服部 文昭 | Comparative and Contrastive Studies in Slavic Languages and Literatures             | 東京大学  | 1998 |
| 助手   | 本川 雅治 | 食虫類の自然史   | 比婆科学教育振興会   | 1998 |
| 教授   | 上林 彌彦 | Proceedings of the 5th International Conference on Foundations of Data Organization |   | 1998 |
| 教授   | 相良 直彦 | 郷土の華  | 信毎書籍出版センター  | 1998 |
| 教授   | 宝月 誠  | 社会生活のコントロール   | (株) 恒星社厚生閣  | 1998 |
| 名誉教授 | 西田 龍雄 | 西夏語研究新論   | 西田先生古希記念会   | 1998 |
| 総長   | 長尾 真  | 中国技術史の研究 他13冊   | 京都大学学術出版会 他   | 1998 |

## I N D E X

|   |    |
|---|----|
| ◎総合研究からみた集中方式的図書館機能充実への願い                         | 1  |
| ◎中国古代における書物の編纂                                    | 3  |
| ◎新入生オリエンテーションのご案内                                 | 5  |
| ◎沿革史編纂から大学アーカイヴズへ                                 | 6  |
| ◎薬学部図書室紹介シリーズ「京都大学図書室巡り」                          | 8  |
| ◎平成10年度全国共同利用図書資料（大型コレクション）－「18世紀フランス建築・都市資料について」 | 9  |
| ◎平成10年度全国共同利用図書資料（大型コレクション）－「18世紀フランス建築・都市資料リスト」  | 9  |
| ◎教官寄贈図書一覧（平成10年9月～12月）                            | 12 |

### 編集後記

京都大学電子図書館がスタートして2年目の春を迎えます。新しい機能が追加され、コンテンツも充実させるべく努力が続いています。従来の図書館も資料の充実に努めています。事務の改善、合理化、効率化が利用者サービスの向上につながるものであって欲しいと願っています。(み)